

Communicative Competence の育成

—— 効果的な AET との Team Teaching を求めて ——

足利市立山辺中学校

三 村 文 雄

1 はじめに

足利市が外国人英語講師を採用するようになって5年になる。外国人英語講師の招致は、昨年度までは文部省が担当していたので、彼らは MEF(Mombusho English Fellow) と呼ばれていたが、62年度からは文部省・外務省・自治省の共同事業となり、彼らに対する呼称も AET(Assistant English Teacher) と変更された。同時にその数も昨年度までは全国で約240名だったが、62年度には約850名が来日した。64年度までには約3000名を招致する予定とのことである。こうした状況は、日本の英語教育に対する社会的要請を反映したものである。今日の英語教育の課題は、我が国の国際化の一翼を担うべきこと、英語を通して外国の人々とコミュニケーションができる基礎的能力を育成することである。62年12月に発表された教育課程審議会による「教育課程の基準の改善に関する基本方針」の最終答申の中で、外国語（英語）においては「聞くこと・話すこと」の言語活動の指導を一層重視することが示されているのも、時代の要請に対応したものと言えよう。学習者の莫大な時間と労力にもかかわらず、いろいろな事情から、使える英語力の育成ができないでいる日本の英語教育界にとって、AET の来日は、まさに江戸末期における黒船の来航に似ている。足利市がこうした状況に敏感で、既に5年前に外国人講師の導入を始めた先見の明には、英語科担当教員として誠に感謝に耐えない。さらに本市では63年度からは AET の1名増員が予定されており、本市の英語教育は益々発展していくものと確信しているが、そのためには、AET との Team Teaching の研究だけでなく、日常の指導についての研究が十分になされていく必要がある。本稿では、今までの実践を踏まえて、AET との Team Teaching（以下、TT と略す）の理論的位置づけ、日常の授業の在り方、及び AET との TT の実践例などを紹介し、本市におけるこれからの英語教育に資したい。

2 AET とのTT の基本的な考え方

(1) 正しい英語の学力観

日本人の英語教師が AET との TT をどう受けとめるかは、教師一人一人が持つ英語の学力観にかかわっている。文部省の和田稔教科調査官はある講演で「正しい英語の学力観はひとつではないかも知れないが、そんなにたくさんあるわけではない」と述べられ、次のような例をあげられた。

ア 文法事項、文型、語いなどの個々の言語材料をいかに多量に記憶しているか。

イ 教室等で学習している過程で学習した具体的な発話をそのまま再生できる力。

ウ 発話や文法事項などの学習した言語材料を未知の新しい場面や文脈の中で、生かして使える力。

和田調査官は、「これからの英語教育においては、ウの学力観に立って生徒の英語力を強化していくことが必要である」と述べられた。

生徒の学力は日常の授業の積み重ねで育成される。教師がア又はイのような学力観に立って日常の指導を行っている場合、AET の訪問も効果的と感ずるより、時間のロスと感じられよう。生徒の方も AET の訪問を単に珍しい体験をして楽しかったという程度に終るか、さらにひどい場合は、「AET の話がわからない」、「自分の言いたいことも言えない」というもどかしさを感じるだけに終わってしまう。ウのような観点に立って日常の指導を積み重ねておいてこそ、AET の訪問は生徒にとって未知の新しい場面で既習の言語材料をいかに生かして使えるかを試してみる絶好のチャンスとなる。生徒は AET との直接の対話を通して、英語が生きた言語であり、これを学ぶことによって自分とは文化の異なる人々と広く交流できることを実感し、あわせて、英語学習の喜びを体験することになる。

63年度の中頃から本市では2名の AET が教室訪問を行い英語指導の援助をすることになるが、それでも1クラス当りで考えると年間で数回という、いわゆる one shot visit の形である。AET との TT だけで生徒の communicative competence を育成することは期待できない。教師がウのような英語観を持って日常の指導を積み重ねていくことが本筋である。このような基本的姿勢に立った上で、AET との TT には次のような観点で臨みたいものである。

- ア 日常の授業で行っている言語活動をより一層 real なものとする。
- イ 特に「聞くこと、話すこと」の言語活動を一層高めるよう配慮する。
- ウ 生徒の学力を評価する機会とする。
- エ 英語学習への意欲を高める。

(2) Communicative Competence とは何か

外国語教育において生徒に身につけさせたい力を communicative competence と呼ぶようになって10数年経つ。これは、簡単に言えば、対象言語を用いて意思の疎通ができる能力ということである。この能力はどのような要素から成るものであろうか。和田調査官はあるひとつの定義として、次のように説明された。

- ア 文法能力：
 - ・個々の言語材料に関する知識。一般的に「基礎的・基本的事項」と呼ばれている。
- イ sociolinguistic competence：
 - ・場面や目的や人間関係などによって、どのような英語表現を使用したらいかが判断できる能力。
 - (例)“I want you to～.” と I would like you to～.” などを適切に使い分けられる能力。
- ウ discourse competence：
 - ・1文1文の単位で英語を考えるのではなく、パラグラフ等の単位で考える能力。概

要や要点を把握することのできる能力。

- ・次の対話において、話者Bにはこの能力が欠けている。

A : Did you go to the concert yesterday ?

B : No.

“No.”の後に“I had to do my homework.”などと応じられる能力をさす。

エ strategy competence :

- ・あることを話そうとして間違った言い方で始めた時、途中でそれに気づいてうまく言い直せる能力。

communicative competence をこのように定義してみると、従来の指導の反省点と、これからの指導の配慮事項が見えてくる。

〈反省点〉

- ア 文法能力の指導に偏重していた。
- イ 指導計画が文法事項などの言語材料に基づいて組まれていた。
- ウ 文法を現実のコミュニケーション場面で機能させる訓練が欠けていた。

〈配慮事項〉

- ア 指導計画を立てる際、言語材料のみでなく、言語活動、特に状況の設定に基づいた指導計画を盛り込む。
- イ 国際的な場面での正しいマナー、エチケットの指導などにも配慮する。
- ウ 英文を1文1文独立させて、前後に意味のつながりのないままに指導するのではなく文脈の中で指導する。(文型練習などの工夫)
- エ 英語の logic について指導する。(特に、読解指導や作文指導などにおいて)
- オ 意欲的に学習しようとする教室の雰囲気作りに努力する。(生徒のミスに対する教師の寛容、他の生徒の supportive な態度、教師と生徒及び生徒同志が気軽に意思の疎通ができる雰囲気、など。)

(3) Communicative Competence の習得過程

従来の指導が文法事項等に偏重していたにもかかわらず、生徒が身につけたはずの文法能力は生きたコミュニケーションの場面では容易に機能しないというのが偽らざる現状である。教師の持つ英語観に問題があることは先きに述べたが、では、教師が正しい英語観を持っていれば communicative competence の育成は成功するか。必ずしもそうとは限らない。

従来の指導で不足したものは listening の能力を高める指導である。国語の学習では、生徒が既に「聞くこと」の能力は相当に身につけていることが前提であるが、これは外国語学習にはあてはまらない。言語の学習において学習者はまず「聞く」という過程を通して、言語の分析・統合を行い、構造や機能を理解する。この過程を十分に積まないままに、「話すこと」や「書くこと」の練習をしてみてもあまり効果は期待できない。「聞くこと」の能力が

「話すこと」や「読むこと」の能力に正に転移をもたらすという実験報告もあり、「聞くこと」の能力こそ、communicative competence の基礎をなすものであることについて、もはや議論の余地はない。

「聞くこと」の能力をどう高めるか。Rivers は次の4つの段階を示している。

A Identification : (音の識別)

(活動例)

- a いろいろな言語のテープを聞き、学習対象言語をあてる。
- b 歌などを楽しむ目的で聞く。
- c minimal pair を用いて、音素の識別をする。
- d 絵を用いて、句の識別をする。

B Identification and selection without retention : (一連の意味を聞き分けながらも、聞いたことの再生が不要な、わかる喜びを味わう聞きとり)

(活動例)

- a 既習の対話や物語などを言い換えたものを聞く。
- b 読み物教材の文化的背景や裏ばなしなどを聞く。
- c 絵やスライドなどの説明を聞く。
- d 絵を用いたゲームや“Bingo Game”などをやる。

C Identification and guided selection with short-term retention : (生徒は聞く内容に関して前もって指示を受け、聞き取った事柄を何らかの形で即時に再生する。)

(活動例)

- a 前もって与えられた True/false の問題や選択肢の問題に聞き取った事柄に基づいて答える。
- b 話された物語などを動作のみで演じる。
- c 教室での諸活動における英語の指示に従って行動する。
- d 教師や生徒の説明を聞いて“Who is it ?” “Where is it ?”などをあてる。
- e 英文を聞いて、語や句を書き取る。
- f いくつかの情報をもったパラグラフを聞いて、前もって与えられていた質問に句で答える。(話す、又は書く。)

D Identification and selection with long-term retention : (生徒は、聞き取った後で、理解したことを発表したりそれを用いたりする。時には、聞き取ってしばらく間を置いてから、それらの活動をする。)

(活動例)

- a 聞き取りをした後で口頭で与えられる True/false や選択肢の問題に答える。
- b 聞き取りをした後で口頭で与えられる質問に答える。(話す、又は書く。)
- c あるパラグラフを聞いた後で与えられる cloze test に答えを書く。

(※ Rivers は D の活動例としてはもっと高度なものをたくさんあげているが、現場の

実情にあわないので省略する。)

さて、以上のような「聞くこと」の能力を高めるための活動を段階的に計画的に、しかも十分に積んでこそ、他の能力の育成が可能なのである。Riversはコミュニケーションの能力を習得する過程を図式化しているが、やや簡略化して示すと次のようなものである。

skill-getting	cognition (knowledge)
	production (or pseudo-communication)
skill-using	interaction (or real communication)

Rivers はこの図式に次のような注を付している。

ア skill-getting と skill-using は前者から後者へ進んでいくようなものではなく、並行して相補関係を保ちつつ、同時に進行するものである。だから、生徒に学習対象に対して目を広げるように意欲づけを図っていけば、初期の段階から本物のコミュニケーションは成立しうる。

イ skill-getting と skill-using の間の gap を埋めるには、skill-getting の活動が、既に pseudo-communication の形になっていることが必要で、その活動から自然に real communication へと移行していけるように工夫すべきである。

(4) TT における AET の役割

文部省が AET に期待していることは次の 4 つの点である。

ア 英語が生きた言語であることを（生徒及び日本人英語教師に）示すこと。

イ 生徒に英語を母語とする人々との英語によるコミュニケーションの機会を与えること。

ウ 英語の学習は楽しいものであることを示すこと。

二 生徒の（外国人に対する）心理的な抑圧感を取り除く手助けをすること。

アは正しい英語観の確立に資することであり、これは正しい評価観にもつながる。イは本物のコミュニケーションを体験させることであり、ウとエは英語学習への意欲づけ・動機づけである。これらは、本稿の2の(1)の最後に述べたことと概略で一致する。これらのAETの役割と彼らの能力・特性をTTの中にどう位置づけたらよいか。Riversの図式を採用して1つのモデルを作成してみる。

skills の 段 階		AET の 能力・特性	TT における AET の活躍場面
skill- getting	言語材料について の理解 (音声, 文法事 項など)	正しい発音 生きた英語	・正しい発音の提示。 ・生徒が間違いやすい発音の練習。 ・新出事項等の生きた場面での揭示。 (導入用対話文の作成, 日本人教師とペア を組んでの提示など。)
	言語材料の構造 的な内面化	生徒の学習 意欲を高揚 させる存在	・モデルを示して生徒の自発的な発話をひき 出す。 ・生徒に選択の余地を残した対話練習
	pseudo- communicati- on	英語表現の 豊かさと柔 軟性	・spoken form of English のいろいろな特 徴の練習。 ・一定の言語材料を用いたコミュニケーション の練習。 (クイズ・ゲーム・応用対話など) ・本文の要約, 理解確認の質問。
skill- using	real communicati- on	外国人であ ること	・生徒の心理的抑圧感を取り除き, 英語が通 じた「喜び」を体験させる。
		豊かな表情	・生徒に生きた英語の音声の豊かな表情を示 す。 ・ことばのみでなく, ジェスチャーなどの身 体全体の表情によるコミュニケーションを 体験させる。 ・諸活動の途中での生徒との interaction.
		文化的背景 (国際性)	・ことばの文化的背景を理解させる。 ・場面や人間関係に応じたことばの使い方を 体験させる。 ・AETと生徒が自己紹介をしあうことで, 文化の相異を受容的に理解させ, 国際的な 協調の精神を養なう。 ・教科書題材に関連して文化的背景の説明。 ・英米の風俗・習慣などについての説明。

3 日常の授業の在り方

(1) 「聞くこと・話すこと」の言語活動の重視

「聞くこと」の能力が communicative competence の基礎をなすものであることは既に述べた。橋本光郎氏も中学校では50%を Listening に当てるべきだと主張している。浅野博氏は聞く能力を高めていく過程では生徒の能力向上がしばらくの期間停滞することがあり、これは心理学の上では“plateau”と呼ばれるが、一種の潜状態期であり、この期間がその後の能力向上に非常に重要な意味を持つと述べている。文部省の学習指導要領の言語活動の項でも、「聞くこと」が他の領域の言語活動を支えているとする考え方がはっきりと打ち出されている。「読むこと」の言語活動で音読にかかわる指導事項が3つあげられているが、これは「聞くこと」の能力が身につくことこそ可能なのである。また、「書くこと」の指導事項にも「文を聞いて正しく書き取ること」があげられている。

鈴木忠夫氏は学習指導要領の解説書の中で、「聞くこと・話すこと」の言語活動における指導事項について、「基本的な指導事項」と「態度に関する指導事項」を次のように示している。

〈「聞くこと・話すこと」の言語活動〉

指導事項	基本的な指導事項	態度に関する指導事項
(ア) 話題の中心をとらえて、必要な内容を聞きとること。	① 事柄の大体を聞くこと。 ② 話の要点を聞き取ること。 ③ 話の内容を要約して聞くこと。 ④ 話の内容を再構成して聞くこと。 ⑤ 事象、感想、意見を聞き分けること。	① 話を終りまで注意して聞くこと。 ② 話し手のほうを見て静かに聞くこと。 ③ 相手が話しやすい態度で聞くこと。
(イ) 話そうとする事柄を整理して、大事なことを落とさないように話すこと。	① 順序を考えて話すこと。 ② 要点を考えて話すこと。 ③ 話題からそれないように話すこと。 ④ 話す目的に応じて、時間、順序を考えて計画的に話すこと。 ⑤ 根拠を明らかにして話すこと。 ⑥ メモや要点を書いたものをもとにして話すこと。	① 聞き手を見て恥かしがらずに話すこと。 ② 聞き手によくわかるように話すこと。 ③ はっきりした発音、特にイントネーションやリズムに注意して、その場に合った適切な音量で話すこと。 ④ 相手の気持ちや立場を考えて話すこと。
(ウ) 相手の意向を聞き取って、的確に話すこと。	① 尋ねられたことに答えること。 ② 相手の話の内容を受けて話すこと。 ③ 話題からそれないように話すこと。	(ア)、(イ)で述べられている事柄。

なお、「聞くこと・話すこと」の言語活動を高めるためには、英語で授業を進めることが効果的であるが、斎藤誠毅氏はその際の基本的な考え方として「単純にして、真似がしやすく、動作・ジェスチャーのともない得る英語」から生徒を慣らししていくことを勧めている。また氏は、生徒との自然なやりとりの中で、“Really?” “Oh, did you?”などのあいづちの表現を覚えさせたり、日本語の「ウソ」「ホント」に相当する“Are you kidding?” “I don't believe it.”なども教えておくことを勧めている。さらに付け加えれば、次のような言い方も習慣づける必要があろう。

T : Understand ? —— S : Yes. / No.

T : Does anyone want to try ? —— S : Yes. I'll try.

T : Very Good. —— S : Thank you, sir.

T : Thank you for ~ . —— S : You're welcome.

S : Excuse me. May I ask you a question ? —— T : Sure.

ほめことばも、表情を変えていろいろと変化させた方がよい。Great. Fantastic. Excellent. Perfect. You speak like an American. など。

(2) 1 単位時間の学習指導の展開

日常の授業で、skill-getting と skill-using を並行させた活動をいかに展開していったらよいか、以下に「聞くこと・話すこと」に重点を置いた1つのモデルを示す。

学習の 段 階	言 語 活 動	skill- getting	skill- using
復 習	1 前時までに学習した事柄の復習		
	(1) スピーチを聞く。(教師又は生徒によるスピーチ)		H. S
	(2) スピーチの理解確認。		H. S
	2 前時に学習した事柄の復習		
	(1) 語や文を英語の正しい音声上の特徴をもって発音する。	H. S	
	(2) 目標となっていた文型や文法事項などの言語材料を用いて、自発的な発話や対話をする。	H. S	
導 入	(3) 本文をはっきりした発音で正しく音読する。	R	
	(4) 本文の内容に関して英語の質問に英語で答える。	H. S	
	(5) 語や文を聞きとって正しく書き取る。	W	
	3 新出の言語材料の導入		
	(1) 文法事項、文型などの意味や使い方を理解する。	H. S	
	(この活動において、教師は例文を示して日本語で意味や使い方を説明するのを避け、目標となる言語材料が使		

導 入	用される状況を設定して、その中で既習の言語材料を用いながら、新出事項の意味や機能を生徒が推測しながら理解できるように工夫する。) (例) ・ 目標言語材料：受動態 ・ 準 備：簡単な言語地図 (言語別に数か国を色分け) ・ 導入例： T : Look at this map. This is a map of language. Japan is here. Japanese is spoken in Japan. But Japanese is not spoken here in China. Chinese is spoken in China. What about in America ? What language is spoken in America ? S : English. T : Right. English is spoken in America. Repeat after me. English is spoken in America. S : English is spoken in America. (2) 語の発音、意味、使い方を理解する。 (時間的にゆとりがないために、意味や使い方については日本語で説明がなされたり、宿題として生徒が予め調べてきていることが多いが、いくつかの単語にしぼって、絵や既習の言語材料を用いて英語でなされる説明を聞いて正しく理解するという必要もある。) 4 本文の題材の導入 (1) 1年生では本文のテープ、又は教師の音読を聞く。2年生、3年生では本文を要約した教師の話を聞く。(課の途中であれば、前時までに学習した題材も話の中を含める。) (2) 理解確認のT/Fテスト、又はQ-Aテスト。 ※ 言語活動の重点を「読むこと」に置いた学習指導では、黙読をして、理解の確認をするという展開もある。	H H. S S H. S H H H. S (R)
-----	---	--

展 開	5 本文の音読 (1) モデルを聞く。 (2) モデルの後について chorus で音読する。 (はじめは、語や句又は意味グループの単位で区切り、音を正しく把握してから、文単位で区切って音読する。) (3) 生徒自身で chorus で音読し、一定の速度を把握する。 (4) 個人で音読する。 (5) 指名されて一人で音読する。	R	
	6 理解の確認 (1) プリントで提示される本文に関する数個の statement について、True/False の判断を下し、False の場合は statement を本文にあうように訂正する。 (2) 上記の問題の答えあわせを英語でする。	R. W	H. S
	(3) プリントで提示される本文に関する英語の質問に英語で答えを書く。(提出する)	R. W	
まとめ	7 言語材料のまとめ (1) 本時に学習した語の発音、意味、使い方を復習する。 (2) 本時の目標である文法事項又は文型を用いた自発的な発話や対話をする。	H. S	H. S
	8 題材のまとめ (1) 本時に学習した本文のパラグラフ構成上のkey word や key sentenceなどを用いて概要や要点を確認する。 (2) 次時に学習するパラグラフの予測をする。	H. S	
	※ 言語活動の重点を「書くこと」に置いた学習指導では、7・8の活動は「書くこと」の言語活動として展開するということもある。	(W)	(W)

なお、活動の途中で行われる教師と生徒又は生徒同志の interaction は「聞くこと・話すこと」の skill-using の活動として位置づけられよう。

(3) 課の展開計画

言語材料についてのみ教えるのではなく、言語活動の能力を育成することが英語科の課題である。これを達成するには、教科書を教えるのではなく、教科書で教えるという考え方に立つべきである。この考え方に立つと、生徒の学力を常に正しく把握し、発達段階にあわせて指導の強化・補充が必要となる。そのためには、年間指導計画に基づいた課の展開計画を作成し、課ごとに形成的評価を実施して、その後の指導の改善に役立てるとか、生徒に自分の課題を認識させることでその後の学習におけるめあてや意欲をひき出すことかの工夫がほしい。以下に、課の展開計画のモデルを示す。

〈「聞くこと・話すこと」の言語活動に重点を置いた課の展開計画〉

(本文が3つのセクションに分かれている場合)

区分	目標言語材料	言語活動	重点
第1時	・既習言語材料	1 課全体の題材の導入。 (既習の言語材料を用いるか、絵、写真、実物などの補助手段を講じるかして、生徒たちと英語で interaction を行ないながら導入する。)	H・S
第2時	・主要言語材料	2 本課でのスピーチの課題を示し例文を紹介する。	H
第3時	・補助的言語材料	3 本課でのスピーチ当番の生徒数名を決める。	H・S
第4時		4 スピーチで使用しそうな表現をあげて練習する。	H・S
第5時	・本課で学習した 主要言語材料	(前項、「1 単位時間の学習指導の展開」とほぼ同じものである。)	H・S R W
		1 文型練習的な活動から、自発的な発話や対話をひき出す活動。 (例) S ₁ : I am happy when I am cooking. S ₂ : I am happy when I am eating. などと数名の生徒が発話した後、教師が、“Is S ₁ happy when she is eating ?” “When is she happy ?” などの質問をなげかけていく。	H・S
		2 文型練習や聞き取り練習をかねたゲームなど。	H・S

第6時	・本課で学習した 主要言語材料を 含む既習言語材 料	1 生徒のスピーチ (本課で発表した生徒の中からチャンピオンを選 び、再発表)	H.S
		2 本課の題材に関連した教材を用いての聴解力テ スト。(形成的テストとして実施)	H

注1 時間的にゆとりがない場合は、第1時において、本文の第1セクションも扱うこととする。

注2 第5時の内容は one shot visit の場合の AET との TT でよく扱われるものである。

(4) 年間指導計画の作成

AET との TT を意識して年間指導計画を作成する上で、次のような点に配慮するべきである。

ア 言語材料の反復の工夫。

イ 言語活動の工夫と、意欲をひき出すゲーム等の工夫。

ウ 英語学習の雰囲気盛りあげる「教室英語」や英語の歌の適切な活用。

エ 生徒が進んで言語活動に取り組めるよう意図した適切な辞書指導。

オ 学習指導要領に示された「言語活動」の指導事項に関連した適切な形成的評価の実施。

〈学習指導要領に示された言語活動の指導事項〉

言語活動	指 導 事 項
ア 聞く こと、話 すこと。	(ア) 話題の中心をとらえて、必要な内容を聞き取ること。 (イ) 話そうとする事柄を整理して、大事なことを落とさないように話すこと。 (ウ) 相手の意向を聞き取って、的確に話すこと。
イ 読む こと。	(ア) はっきりした発音で正しく音読すること。 (イ) 文の内容を考えながら音読したり黙読したりすること。 (ウ) 文の内容を理解して、内容が表現されるように音読すること。 (エ) 書かれていることの内容を全体としてまとめて読み取ること。
ウ 書く こと。	(ア) 文を聞いて正しく書き取ること。 (イ) 書こうとする事柄を整理して、大事なことを落とさないように書くこと。 (ウ) 書かれているこの内容を読み取って、それについて書くこと。

以下に各学年の年間計画について、それぞれ1部を示す。表中、◎や○は重点を示し、(ア)(イ)(ウ)等は、学習指導要領に示された各領域の指導事項を示すとともに、その事項に関しては形成的評価を実施することを示している。

〈第 1 学 年〉

・方 針

ア 「聞くこと、話すこと」の言語活動を重視する。特に、「聞くこと」の能力の育成に関しては、発達段階を十分に考慮して適切な指導を工夫する。

イ 「教室英語」に十分に慣れさせる。

ウ 綴りと発音の規則性に注目させて、音声指導や書き方の指導を行う。

月	課 (時)	主要言語材料	題 材 内 容	言 語 活 動				教材・教具等
				H S	R	W	工夫すべき事項	
4	1	英語の文字 (alphabet)	「英語の文字」	◎			教室英語，ゲーム “New ABC Song”	・カード ・4線紙
	2	・単語 ・綴りと発音の 規則性	「英語の単語」 身近な品物， 人名，など	◎		○	教室英語，ゲーム （“Simon says”，かるた， など）	・綴りと発音 の規則性を 指導する単 語表 ・かるた
	3	・句 ・所有格 ・単数，複数 ・音調，強勢	「ぼくの帽子」	◎ (ア)		○	教室英語，ゲーム （あなたの～ですか） “Ten Little Indian Boys”	・生徒の学用 品 ・聴覚テスト
	4	・This is ～ ・That is ～ 肯定文，否定 文，疑問文	「手品」 身近な品物	◎	○ (ア)	○ (ア)	教室英語，クイズ，持ち 物の紹介 →本文の音読 →1文ずつの書き取り	・学用品，絵， 写真，CHP など
	L T (3)	・あいさつの言 い方	「ボブの1日」	◎ (ウ)		○	教室英語 →寸劇	場面を説明す るカード

〈第 2 学 年〉

・方 針

ア. 「聞くこと、話すこと」の言語活動を重視する。特に「話すこと」の能力を段階的に育成するよう工夫する。

イ. 教室英語を発展させ、英語で授業を進める。

ウ. 発音記号や辞書の指導を実施する。

エ. 文型や文法事項等の内面化を促進させるゲームやクイズなどを工夫する。

月	課 時	主要言語材料	題 材 内 容	言 語 活 動				教材・教具等
				H S	R	W	工夫すべき事項	
4	1	・ 1 年生の復習 時刻, 季節, 天候などを表 わす it の用 法, can など	「Australia」 ・	◎	○		・ オーストラリアの風物 を表わす絵や写真等を 用いた対話 ・ “Waltzing Matilda”	・ 世界地図, 写真, ポス ター, 実物 ・ 聴解テスト
	(7)			(ア)				・ 会話テスト
	2	・ 接続詞 and, but ・ 文型 SVC look ・ 付加疑問文	「Moonland School」 生徒にとっ ての理想的な 学校	○	◎ (ア) (イ) (ウ) (エ)		・ スピーチ 「私の好きな学校」 ・ 辞書指導	→ 読解テスト
	(7)							
	LTr (1)	・ 数詞	計算	◎			・ 班対抗計算コンクール (生徒が出題)	・ 集計表
5	LTa (1)	・ 天候に関する あいさつ ・ 付加疑問文	・ 天候に関する あいさつ	◎			・ 寸劇 (ペアで)	小道具
	3	・ 規則動詞の過 去形 肯定文, 否 定文, 疑問文	「Yesterday, Jiro…」 昨日の学校 生活について	○	○	◎ (イ)	・ スピーチ (数名) 「昨日の出来事」 ・ 課題作文 (全員) 「昨日の出来事」	絵, OHP
	(6)							

〈第 3 学 年〉

・方 針

ア. 「聞くこと、話すこと」の言語活動を重視しつつ、他領域相互の関連を図る。

イ. 理解確認の方法等を工夫して、英語で授業を進める。

ウ. 読解補助教材の自主的学習を促進する。

月	課 時	主要言語材料	題 材 内 容	言 語 活 動				教材・教具
				H S	R	W	工夫すべき事項	
4	1 (8)	・形容詞の比較級, 最上級 more～ the most～ ・副詞の比較級, 最上級 better the best	「Club Activity」 映画研究会の紹介	◎ (イ)		○ (ア)	・スピーチ (全員) 「私のクラブ、部」 ・映画のサウンドトラックからの録音テープを聞き、どの映画かをあてる。	・写真, ポスター ・テープ
5	2 (7)	・接続詞“that” ・過去分詞, 現在分詞の形容詞的用法 used～ running～	「Air Is Powerful」 空気には力があることを 試す実験	○	◎ (ア) (イ) (ウ) (エ)		・スピーチ (数名) 「日常生活の中の新しい発見」 ・演示実験	・実験道具 →読解テスト
	LTr (2)	季節の言い方	「The Four Seasons」	◎ (イ)		○ (イ)	・スピーチ, 課題作文 「私の好きな季節」	四季のカラー写真
	LTa (1)	・飲み物などをすすめる表現 ・相手の健康を気づかう表現	日常的な会話	◎			・寸劇 (英語を楽しむ気持ちで)	小道具又は絵
	3 6	・現在完了 (継続)	「Mr. Carpenter In Japan」	○	○	◎	スピーチ (数名) 「日本の紹介」	・課題一覧表 ・語いリスト

	(7)	肯定文、否定文、疑問文	外国人から見た日本文化		(ウ)	・課題作文（全員） 「日本の紹介」	・日本紹介の 例文

4. AETとのTTの実践例

(1) 実践例 I

① 題材：自己紹介

② ねらい：

ア. AETと生徒が相互に自己紹介をしあうことを通して、「聞くこと、話すこと」の言語活動を高める。

イ. AETとの直接のコミュニケーションを通して、外国のようすを理解させるとともに適切な対応の態度を養う。

③ 事前準備：

ア. 指導案を作成する。

イ. AETに面会し指導案を示して、意見の交換をする。

ウ. 自己紹介の内容について依頼する。

エ. 次のような作業用紙を作成して、事前に生徒に配布する。

“Welcome, Beth.” September 1, 1987 Name _____

(次の各英文がBethさんの自己紹介の内容とあっていればT、間違っていればFを、それぞれの文末の()の中に書きなさい。Fの場合はその文を正しく直しなさい。話を聞きもらしたり、Bethさんが話さなかったりしたことについては、直接質問して確かめなさい。)

1. Beth comes from Los Angeles. ()
2. She has visited Japan before. ()
3. She has been to Europe twice. ()
4. There are six people in her family. ()
5. She has two sisters. ()

※ 作業用紙に書かれている事柄については、いくつかの項目について話さないようにAETに依頼しておき、生徒たちが質問しなければならない状況を作る。

④ Lesson Plan:

Lesson Plan	Instructor : F. Mimura
	Date : September 1, 1987

1. Topic : Self-introduction

2. Aims :

- (1) To develop the students' listening and speaking abilities through self-introduction by both students and AET.
- (2) To give the students general idea about AET's county through interaction, teaching them a good manner concurrently.

3. Procedure :

- (1) Greeting. (including a welcome address by a representative student.) (2 min.)
- (2) Singing a song. (2 min.)
- (3) Speaking Practice. (20 min.)
 - ① Self-introduction by all the students.
(The student will ask AET a question concerning the topic of his / her speech.)
- (4) Listening Practice. (10 min.)
 - ① Self-introduction by AET.
(AET is requested to talk about favorite things, family, experience of being abroad, and so on.)
- (5) Speaking and Listening Practice. (10 min.)
 - ① Students will correct the statements about AET given in written form previously, according to AET's speech.
 - ② In the case of being not sure about the information they've caught, they will ask AET about it.
(JTE will help the students.)
- (6) Evaluation and Commendation. (5 min.)
 - ① AET and JTE will discuss about the students' performance to select the best students.
 - ② The best students will be given certificates by AET.
(AET is requested to prepare about ten sheets of certificate)
- (7) Address of thanks by a student. (1 min.)

⑤ 反 省 :

ア. 全員に自己紹介をさせたことにより、遅れがちな生徒も積極的に授業に参加した。
なお、遅れがちな生徒は事前に教師や級友が援助しておいた。

イ. 生徒の自己紹介をAETの自己紹介の前に置いたのは、これを逆にすると、自分の

自己紹介のことで頭がいっぱいになってしまい、AETの話に集中できない生徒が出ることを避けるための配慮である。適切であった。

ウ. AETの自己紹介に際し作業用紙を使用したことで、単に聞くだけという受け身の学習にとどまらず、積極的に聞こうとする態度や、質問して確認してみようという能動的な活動をひき出すことができた。

エ. 作業用紙にはAETについての情報が三人称単数で書かれており、それについて生徒がAETに質問する場合は二人称に直して発話しなければならないが、この切り換えができない生徒が多く、今後の指導の必要性を感じた。

オ. AETに対する補充質問の際、質問を切り出すことば“Excuse me.”などがわからず、もじもじしているようすが見受けられた。日常の授業における「教室英語」等の活用が不十分であった。

カ. 質問のできる生徒は数名の生徒に限定されていた。日常の授業では教師が質問して生徒が答えるという活動はあるが、その逆はほとんどなかったからである。

キ. 授業の結果を「聞くこと、話すこと」の形成的評価として使用したいと考えていたが、「聞くこと」に関しては作業用紙が利用できたが、「話すこと」に関しては印象しかなかった。VTR又はテープに収録しておく必要を感じた。

(2) 実践例Ⅱ

① 題材：Junior Crown Book 2 Lesson 8のまとめ

② ねらい：

ア. 生徒の将来の希望を題材として、「聞くこと、話すこと」の言語活動を高める。

イ. 生徒の夢や想像力や空想力をひき出し、不定詞の3つの用法を用いた「聞くこと、話すこと」の言語活動を通して、不定詞の使い方の内面化を図る。

ウ. 教科書の本文全体の要約を聞き、質問に答える活動を通して、「聞くこと、話すこと」の言語活動の基礎的な能力の育成を図る。

③ 事前準備：

ア. 指導案を作成してAETに送付する。

イ. AETの訪問にそなえて、本課の各セクションで「聞くこと、話すこと」の言語活動に重点を置いた指導をしておく。

ウ. 指導案についてAETと意見交換をする。(当日の授業直前)

④ Lesson Plan：

Lesson Plan

Instructor : F. Mimura

Date : November 26, 1986

Class : 2 - 1

1. Topic : Junior Crown Book 2 Lesson 8 Review. (Dream)

2. Aims :

- (1) To develop the students' skill and confidence in communicating orally through talking about their dreams for the future.
- (2) To let the students internalize three usages of " to-infinitive " through Dialogue Practice on the topic of their dreams or fanciful ideas.
- (3) To develop the students' fundamental skill in listening through listening to the summarization of the story in the textbook by AET.

3. Procedure :

- (1) Greeting (A representative student will make a welcome greeting.)
(2 min.)
- (2) Singing a song. (2 min.)
- (3) Listening and Speaking Practice. (15 min.)
 - ① Some students will make a short speech about his / her dream for the future.
 - ② After the speech AET is requested to ask the class to check if they've grasped the outline of the speech. This checking should be done in a phase of a real communication by leading spontaneous responses from other students.
- (4) Dialogue Practice. (15 min.)

- ① AET and JTE will demonstrate a model of Dialogue Practice.

— model —

A : Where do you want to go ?

B : I want to go to _____. (Egypt, the moon)

A : Why do you want to go there ?

B : I want to go there to _____. (see the Sphinx, live there)

But I don't have _____ to go there. (money, a rocket)
(change the role)

- ② Students will be given work-sheets and explanation by JTE.
 - ③ Students will fill the blanks.
 - ④ AET is requested to make a pair and perform the dialogue with volunteer students one after another in the role of A.
- (5) Listening Practice (10 min.)
 - ① AET is requested to summarize the story of Lesson 8 .
 - ② After the summarization JTE will ask the students to check if

they've grasped the outline of the story.

(6) Evaluation and Commendation. (5 min.)

① AET and JTE will discuss to select the best students.

② The best students will be given certificates by AET.

(AET is requested to prepare about ten sheets of certificate.)

(7) Address of thanks by a representative student. (1 min.)

⑤ 反 省：

ア. 前半にやや高度な活動を置き、後半に基礎的な活動を置いたが、開始時に生徒の気持ちをほぐすゲーム的な活動が必要だったようである。

イ. 生徒のスピーチの後で、それに関連したreal communicationの活動をひき出すことを意図したが、活発な活動には至らなかった。日常の指導で欠けていた点である。語いの不足も原因していた。

ウ. Dialogue Practice では、不定詞の3つの用法を同時に内面化しようと意図したが、期待したほどは生徒の活動が盛りあがらなかった。日常の授業で生徒の空想力を働かせた活動をもっと取り入れていくべきである。

エ. 本文の要約を聞かせその後に英問英答を実施したが、これは既に生徒が学習してしまった教材であるためinformation gapの少ないinteractionとなったが、生徒の発達段階によっては、このような活動も必要である。しかし、この授業では、英問英答における生徒の反応はあまり活発ではなかった。生徒の「聞くこと」の能力を評価するには、AETに依頼して、本文に関連した別なstoryを用意して、聞かせるのがよい。

オ. この授業において、生徒の「聞くこと、話すこと」の能力がまだ育っていないことを実感し、形成的評価の必要性を痛感した次第である。

5. お わ り に

本稿に取りかかる当初は、できるだけたくさんの実践例を取りあげたいと考えていた。言語材料等の導入例、言語材料の内面化を図るゲームやクイズ、形成的テストの例（例えば「会話テスト」など）なども取りあげるつもりでいた。しかし、個々の具体的な活動を検討していく中で、教育効果を検討する必要が生じ、理論的な面での記述が多くなった。どういうねらいでどういう活動を取りあげるか、また、どんな方法でそのことを評価しその後の指導に役立てるか、などについて明確にしたかったが、果たせなかった。実践から理論へ、理論から実践への反復は常に教師の宿命的課題である。今後さらに工夫を重ねていきたいと考えている。読者諸賢のご指導ご批判を賜るとともに、本稿が本市の英語教育に少しでも役立つことがあれば、望外の喜びである。

〈参考文献〉

- ・ Rivers, W.M. : A Practical Guide to the Teaching of English as
& Temperley, M.S. a Second or Foreign Language. Oxford, 1987
- ・ 和田 実 : 『国際化時代における英語教育』, 山口書店, 1987
- ・ 鈴木 忠夫 : 『新学習指導要領の内容と指導の実例 中学校外国科 (英語)』
開隆堂, 1977
- ・ 斎藤 誠毅 : 「英語で進める授業での英語表現」, 『英語教育』, vol.××× v 1, No.10,
大修館, 1987, 11月

評

授業を通して、生徒の学習意欲をいかにして高め、さらに言語によるコミュニケーションの能力をどのようにして育てていくかが英語の授業の課題といえます。

外国人教師 (AET) が授業に加わっただけでヒヤリングやスピーキングの力がついたり、国際理解が深まっていくような錯覚におちいりがちですが、協同授業で十分な成果をあげるためには、日常の授業において言語活動を十分行っていること、また、それを生かせるような指導案の作成、指導案についてAETとの綿密な事前の打合わせなど、たいへんな努力を要します。

本市が外国人教師招へい事業を実施してから5か年が経過し、各学校においては、AETとの協同授業を通してかなりな実績をあげてまいりました。今後も、国際感覚の育成をはじめ、楽しく学びながら力をつけていける指導法の研究がいっそう必要かと思えます。

本稿は、AETとの協同授業の在り方について、きちんとした理論に基づいての実践記録であり、さらに、それを支える日頃の授業の在り方にも言及しており、今後のAETの活用の仕方について大きな示唆を与えてくれました。本年度からは、更に1名のAETの増員が見込まれているおりでもあり、その活用について基本的な方針を決めておくことは大切なことです。この意味において、この実践記録の果たす役割はきわめて大きいと言えます。

今後共、いっそうのご研究、ご活躍を期待いたします。